
心の燈火 ～ウィル・オー・ザ・ウィスプ～

保科 郁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の燈火 ～ウィル・オー・ザ・ウィスプ～

【Nコード】

N9002C

【作者名】

保科 郁

【あらすじ】

これは悲哀に満ちた挿話。誰の目にも、誰の記憶にも留まらなかつた……孤独で哀れな少年と少女の物語。．．ハロウィンの【ウィル・オー・ザ・ウィスプ】、ウィルの燈火^{ともしび}を元に書いています。
(10/26、一話加筆しました)

“死者の門”

『さて……どうしたものか』

“死者の門”の番人である聖ペトロは、新しく霊界にたどり着いた死者——俺を見て、静かに呟いた。

ペトロは死者の言い分を聞き、その後の行き先を裁定する役目を持っている。つまり俺が天国か地獄か、はたまたそれ以外になるのかはこいつにかかってるってことだ。

『確かにお前のした事は罪悪と言えよう。

だが、お前の境遇は憐れむべき事……お前ばかりを責めるわけにもいくまい』

天国も、ましてや地獄なんか冗談じゃない！俺にはやり残したことが、やらなくてはならない事があるんだ。

迷っているペトロにほんのわずかな望みを見だし、俺は必死で願ひ出た。

『ペトロ様……俺は自分が生き延びる為とは言え数々の罪を犯してしまったこと、今ではそれを悔いています。

罰があるならば、それを甘んじて受け入れようとも思います』

そんなのは嘘だ。俺は今まで自分がやった事を悔いてなどいない。でも生き返るためなら、どんな嘘でもついてやる！

『でも、俺には現世でやり残したことがあるのです！

俺を憐れだと思いでしたら、どうか……どうか、現世で罪を償

うことをお許してください！！』

俺は地面に頭をこすりつけ、必死に叫んだ。これで俺の今後が決まるんだ……、なりふり構ってなんていられない。

ペトロは考え込むように沈黙したが、数秒後 おもむろに口を開いた。

『……よかろう。お前の心意気に免じて、特別に生き返らせてやろう。』

だが、忘れるな！二度目は決してないということを！！』

儼かなその言葉を聞くや否や、俺の目の前は真っ暗闇に包まれた。

少年、ウィル

次に気付いた時には、ひとり路地裏に倒れ伏していた。

俺はすぐに駆け出した。場所は周りの奴らが話していたのを覚えている。町外れにある、あの悪趣味なでかい屋敷だ。

辺りはすでに宵闇に包まれていた。あれからどのくらい経ったのかは分からないが、急がないと取り返しがつかない。

ちり…と焦燥が胸を焦がす。頭に浮かぶのは、止めどもなく涙を零^{こぼ}していた少女の青白い顔。

俺は自分が死ぬ直前、彼女を見た時の事を思い出していた。

その時も俺は飢えをしのぐ為、食べ物盗み出している所だった。盗みは悪いことだって？ それは俺と同じ立場になっても言えるのか？

親も親戚も、ましてや後ろ盾すらない孤児に世間は冷たい。王や貴族なんか当てにならないし、何にもしてくれやしない。俺みたいな奴らは、生きていく為に そうせざるを得^えないのだ。

それとも死ねと言うのか？

はッ！ 貴族連中が言いそうな事だ。あいつらは 俺達をゴミ以下とは思っちゃいけないからな。死んだって誰も気にしない。寧ろ喜ぶだろう、害虫が一匹いなくなった……と。

誰がそんな奴らの思惑どおりに死んでやるか！

俺は そう悪態をつきながら生きていた。
この世の全てに憤慨し、絶望しながら……。でも、それらに負け
て死んでしまうのは悔しくて。

とにかく、その時もそんな事を考えながら盗みをはたらき、町中を
逃げている所だった。

少女は…。

俺は通りがやけに賑やかな事に気付き、その中ならば追っ手の目を誤魔化せるかもしれない……と足を向けた。

周囲の奴らの騒めきで、賑やかなのは花嫁行列が通っているからなのだと分かった。俺はその煌びやかな一団に目を向け、その中の一人——花嫁その人に目を奪われた。

煌びやかで豪華な衣裳に負けず 彼女はとても美しく可憐で、それでいて儂^{はかな}げな少女だった。

でも俺が目を奪われたのはそんな事じゃない。彼女の身体が遠目からでも分かるほど震えていて、その頬に止めどもなく 涙が零れていたからだ。

俺は一瞬で覚^{さと}った。

彼女が無理矢理、嫁に出されてしまった事に。そして、今夜にでも その身体が穢^{けが}されてしまう事に。

俺は思わず、その一団の中に飛び込んでいた。彼女をそこから解放したかったのだ。

もしかしたら自分と彼女を重ねていたのかもしれない。為す術もなく、己の境遇に流されるしかない無力な者として……。

でも俺は実際 無力で、彼女を助けたすなんて事できる筈もなかった。すぐに警備の奴らに放り出された。

俺は、腑甲斐なさや無力感に打ち拉^ひがれ、男が肩を掴んでくるま で 逃げている最中だった事を思いだしもなかった。

やばいと思う間もなく路地裏に引きずり込まれ、俺は意識がなく

なるまで袋叩きにされた。

手加減、容赦は一切ない。俺が死んだって良心の呵責がないからだ。罪にだって問われない。孤児なんてそんなもんだ。

そして……俺が次に気付いた時は“死者の門”の前だった。

武器を手

そこまで思い出し、俺は自分が無力で 何もできなかった事に気付いた。

このまま向かってもうにもならない……。そう思った俺は、皓こうと光を放つ酒場に足を向けた。

酒場は明るく、ごろつき達の喧騒に包まれていた。そのおかげで、誰も俺に注意を払うことはなかった。

俺は周囲をさり気なく見渡し、酔い潰れている奴に目を付けた。慎重に……。だが素早くそいつに近付き、刀を抜き取る。

うまくいった…と思ったのも束の間、隣の席の奴が声をあげた。

「あつ！おい、お前……！！」

俺は舌打ちと共に、テーブルの上にあった物をそいつの眼に投げ付けた。そいつは呻き声をあげながらも、俺を捕まえよう手を延ばしてきた。

でも俺はそれを余裕でかわし、夜の闇の中へと逃げ出した。

後ろで悪態をつくおたけびが聞こえたけれど、追い掛けてくる様子はなかった。酔いがまわってしまって、うまく走れないのかもしれない。

俺は武器を無事に手に入れたことに安堵し、今度こそ彼女を助けたすため 屋敷に向かって必死で駆け出した。

お願いです、神様！　どうか…どうか、彼女の身をお護りください！！

俺はどうなってもいいから…。せめて、俺がたどり着くまでは。

俺はいつからか祈らなくなっていた神に向け、再び願った。産まれて初めて、これ以上はない程　真剣に。

今まで願いなんて一つも叶えちゃくれなかったんだから、今回くらいいいだろ！…と、悪態をつきながら。

俺は力の限り走った。一分一秒でも早く、彼女の元へ　たどり着く為に。

刃（やいば）

俺が屋敷にたどり着いた時、辺りはすでに暗闇に包まれていた。

草叢くさむらの蔭から屋敷をうかがうと、門前にあるかがり火に警備の奴が照らしだされていた。一人とはいえ、武器など扱った事がない俺が正面から立ち向かって適う相手ではないだろう。

くそっ！ どうしたら……。

焦りで胸がいつぱいになるが、ここで無闇に飛び出しても返り討ちにあうだけだ。

俺は焦る気持ちを無理矢理押さえ込むと、ひとつ息を吸い込み、ゆっくり吐き出した。

手の中には刀がひとつ。俺にあるのはこれだけ……他に武器はない。不意を突くにしても最初の一撃をかわ躲されてしまったら、俺は為す術もなく殺されてしまうだろう。

額にじに滲み出てきた脂汗を袖で拭う。

迷ってる暇はない！ こうしている間にも彼女は……。

俺は意を決すると、その辺に落ちていた小石を拾い、数メートル先の草叢に投げ入れた。

ガサッ！！

「……っ、誰だ!？」

俺の思惑通り門番が近づいてくる。警戒している為か、その足取りはかなりゆっくりだ。

俺は息を潜めてそいつを待つ。

「おい！ 返事をしろ!!」

……あと数歩だ。あと数歩、近づいてくれば刃が届く……。俺は汗で粘つく手を服で拭くと、刀を力を込めて握り直した。

「……おい!!」

……ッ、いまだ!!

俺は力一杯、刀を突き出した。

「……がッ!! な……!!？」

音のした茂みを覗き込み、こちらに背を向けていた門番は、俺の刀を無防備に受けてしまったようだ。何かを言う間もなく、地面に倒れ伏した。

口から血を吐き出し、びくびく^{けいれん}痙攣しているそいつから、ずるりと刀を引き抜く。刀は血肉に^{まみ}塗れ、朱に染まっていた。……と刀を引抜く。倒れ伏した門番の下からも同じ色が^{にじ}滲み出てくる。

俺はそれらを見ないようにしながら屋敷へ足を踏み入れた。直視してしまったら先に進めない気がしたのだ……。

俺は震える手に、身体に気付かない振りをして走った。

神とは…。

けれど、俺がたどり着いた時には……もう遅かった。

彼女は力なく寝台に横たわり、虚ろな……何も映してはいない瞳を空中に向け、ひすら渴いた笑い声をあげていた。

その隣では腰でも抜かしたのか、醜悪な老爺ろうやが がたがた震えながら後退っていた。

きつと俺のことを恐れているのだろう。なんせ俺の右手には、血に塗れた刀まみが握られているのだから。

老爺は大声で喚わめき散らしていたが、俺には何を言っているのか理解からない。理解する気もない。

醜く穢けがらわしいその老爺を、俺は一刀のもとに斬り捨てた。

俺は彼女の元へ近付くと、その細い身体をそっ…と抱き締めた。彼女は未だに渴いた笑い声をあげていた。顔に表情はなく、ただ笑い続けている。……壊れてしまったのだ。

俺は抱き締めた時と同じように、そっ…と優しく彼女を離すと、刀を強く握り締めなおした。

神よ！ もし 居るといふのなら、何故こんなにも酷むじい仕打ちをするのか！！

いったい俺たちが、彼女が何をしたっていうんだ！！

俺は彼の者に怨嗟の言葉を吐くと、彼女に刃を振り下ろし、返す刀で己の喉を突いた。

俺は再び“死者の門”の前に佇んでいた。聖ペトロが俺を見て、深い…深いため息をつく。

『お前がした行いは、とてもではないが許せるものではない。もはや天国はおるか、地獄に入ることすらまかりならん』

そう冷たく言い放つ。だが俺にはその瞳が、悲しみと痛ましさを湛えているような気がした。

『お前は己の罪を贖えるまで、永劫ともいえる時を煉獄で彷徨い続けるがいい』

ペトロは厳かに、俺を裁定した結果を告げた。

心の燈火（ともしび）

こうして俺は闇の中に落とされた。

光も何もない……自分の手すら見えない、真っ暗でどろりとした質感のある闇。こんな所にいたら、気が狂ってしまう。……いや、もしかしたら狂ってしまった方が楽なのかもしれない。

だが、俺が狂えることはない。この闇に落とされる前、俺は灯りあかとして石炭を手渡されたのだ。

この薄らとしたか細い光が、狂いそうな俺の精神を辛うじて繋ぎ止めている。繋ぎ止めてしまっている。

狂ってしまった方がはるかに楽だろうに、狂うことができない。これも贖あがないの内の一つなのだろうか……。それならば、俺の罪はちゃんと贖あがなえているということなのか……？

俺は手の中のか細い光を、そつ…と見つめる。その光の向こうに、哀しげな瞳をした少女が浮かんだ。

いつか、いつの日にか俺が全ての罪を贖あがなえたら…、彼女に再び会える時がくるのだろうか。

今度は、優しい微笑みと共に……。

そんな微かな願いを心の燈火ともしびにして、俺は未来永劫続くこの闇の中を、ただひとり彷徨あかい続ける。
石炭の密やかな灯りを頼りに……。

これは悲哀に満ちた物語。

その昔、あつたかもしれない…なかったのかもしれない 悲しくも痛ましい挿話。

少年ウィルは今も 光の射すことのない暗闇の中を、ひとり彷徨っているのかもしれない。

心の中の微かな燈火^{ともしび}を頼りに…。願いが叶う その日を夢見て…。

了

心の燈火（ともしび）（後書き）

この話は『will o' the wisp』を元にして書いていますが、私なりの書き方をしているので原作とは、話の流れは変わらないものの 全く別物になっていると思います（^ ^ ;）

一応 原作を知らない方の為に、ちよつとした解説を『will o' the wisp』の所に載せましたので、覗いていただけると分かりやすいかと。

【will o' the wisp】

【will o' the wisp】

ウィル・オー・ザ・ウィスプ

直訳すると『一握りの・（ワラなどの）小さな束を手にしたウィリアム（ウィル）』

意識で、『ウィルの燈火（灯火、ともしび）』となります。

▼鍛冶屋ウィルの話

昔あるところに、素行の悪い ウィルという鍛冶屋がいました。

素行が悪かったせいで殺されてしまったウィルは“死者の門”に辿り着き、聖ペトロに地獄行きを言い渡されそうになります。

でも、口の巧さで聖ペトロを騙したウィルは、なんとか地獄行きをまぬがれ生き返る事に成功しました。

二度目の人生でもウィルは悪業三昧で過ごしました。

その人生が終わって再び“死者の門”についた時、聖ペトロは呆れて言います。

『お前は二度目の人生でも、自分の行いを改めるでもなく、悪業を尽くした。

お前には、天国も地獄ももつたない。永久に煉獄を彷徨い続けるがいい！』

こうして、ウィルは永遠に煉獄を彷徨うことになりました。

それをさすがに哀れだと思った悪魔が、地獄の劫火から一握りの石炭を取り出し、灯りとしてウィルに手渡しました。

ここから、ウィル・オー・ザ・ウィスプという名前がついたのだそうです。

ウィルはたまに人間界にも降りてくるそうで、その時ウィルは幽霊で身体が見えないため、石炭の火だけが空中に浮いているように見え鬼火のように見えるようです。

▼煉獄れんごくとは

天国と地獄の間にあり、浄罪界とも言われる。死者の魂が、その罪を火で清めるために赴く所。

▼別名

・ Jack a lantern

（ジャック・ア・ランタン）

ジャックの角燈

（ジャックは一般的な男性の名前）

・ Elf fire

（エルフ・ファイア）

妖精の火

・ Ignis fatuus

（イグニス・ファトウス）

愚かな火、騙し火

・ Hobblerdy's lantern

（ホブルデイズ・ランタン）

ごろつきの角燈

・ G y l b u r n t t a y l

(ジル・バート・テール)

ジルの火の尻尾

など、地方によっても色々あるようです。

日本では、狐火、不知火、しらぬい鬼火、火の玉、など言われます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9002c/>

心の燈火 ～ウィル・オー・ザ・ウィスプ～

2010年10月8日22時08分発行